

次郎長

次郎長の船宿「末廣」復元なる

四月一日オープンには長蛇の列、連日盛況

ひょうたんから駒が出たように、とんとん拍子で事が運んだ末、遂に次郎長が晩年宮んだ船宿の末廣が復元。完成記念式が平成十三年三月三十一日に催され、翌四月一日から一般公開された。

復元された末廣の場所は、もともとあった波止場（現在のマリンパーク付近）から西寄りに約三〇メートル離れた港橋際（清水市港町二一四）である。

木造二階建瓦葺、建坪七〇坪の建物は、なかなかの出来映えで、次郎長やおちょうさんがもし生きていたらその口から、「こんな立派だったかしらん」とでも聞こえてきそうなほどだ。

「清水港に新しい名物出現」「次郎長の船宿復元」などとテレビや新聞でいつせいに報道された故もあつてか、一般公開初日の四月一日には、昼からのオープンを待った長い行列が出来、次郎長人気の根強いことをうかがわせた。

館内一階の展示コーナーには、次郎長翁を知る会からも特別出品し、鉄舟寺所蔵の次郎長坐像、入谷孝裕氏所蔵の富岡鉄斎が末廣の二階から描い

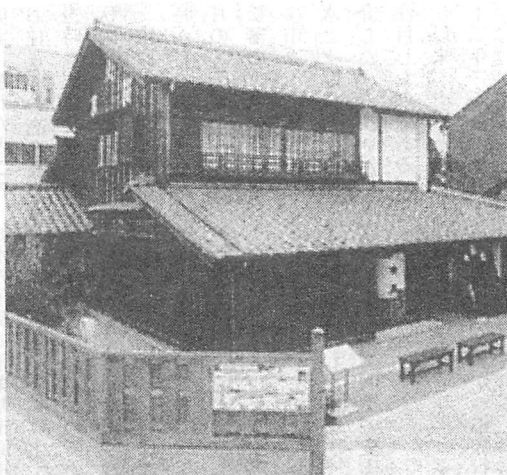
次郎長翁を知る会
会報 第13号
平成13年6月12日発行
発行所
〒424 清水市島崎町6-25
-0823 清水市観光協会内
TEL (0543) 54-2420
発行人 竹内 宏
題字 田口 英爾
印刷所 (株)ニシガイ
TEL (0543) 52-2188

た富士山の図、次郎長が徳川慶喜公から拝領の熨斗目（のしめ）の礼服（土谷家より梅蔭寺に寄贈）など、次郎長ゆかりの逸品が勢揃いして、来館者たちの目を惹いた。

ほかにも、明治元年（一八六八）、次郎長を清水港および周辺の警固役に大抜擢した伏谷如水から次郎長に宛てた指圖書なども出品目録に加えたのであるが、残念ながらスペースが足りないため展示は見合わせられる破目となった。

末廣が開業したのは明治十九年（一八八六）で次郎長は六十七歳。営業はおちょうさんにまかせ彼は波止場の子ども好きなおじいさんとして、子どもたちに相撲をとらせたり、菓子を与えたりして、小笠原長生によれば「袋を持たないほいていさん」のような存在だった。尊敬してやまない山田長政顕彰碑を建てようと駿府城内での相撲興行を催したのが、亡くなる一年前。

明治二十六年六月十二日、ふとした風邪がもとで波乱の生涯を終える。息を引き取る時には、おちょうさんの追憶談「俠客寡婦物語」によれば、



港橋畔、エスパルス通り入口の船宿末廣

しつかりと愛妻の手を握っていたという。

「武士道とキリスト教」の内村鑑三は、次郎長が詠んだという辞世を、明治三十年代に書いた「キリスト教問答」の中に引用している。六でなき四五とも今はあきはてて

さきだつさいに逢うぞうれしき

内村鑑三は、この辞世を知って、これはただの博徒ではないと感銘した旨を付記している。

私事にわたって恐縮だが、編集子の祖父月心和尚は、明治十九年、十三歳の時、師の萬休和尚に連れられ、横浜から第二福沢丸という船に乗って清水港に上陸、第一夜を船宿末廣で過ごし、翌日から梅蔭寺に入って小僧として次郎長に接した。次郎長の葬式で戒名をつけ、（碩量軒雄山義海居士）引導を渡したのは師の萬休和尚である。

小僧の時代から日常次郎長に接していた月心和尚

尚は、次郎長のいわば生き証人で、背だけは五尺二寸だったとか、理屈は嫌いで「実地に」が口癖だといったようなことを編集子に教えた。

神田伯山や神田ろ山などは、よく月心和尚のところへ取材に来ていた。

明治元年の高札

清水には歴史がごろごろころがっている、というのが編集子の持論であるが、果して、末廣に展示するために用意された「民具」の中に、ハツとさせるような貴重な品が、一つ二つ目についた。

一つは、裏側に「上原村」としてある高札。書いてある文字は、雨風に晒されてほとんど読めないが、どうも慶応四年、すなわち明治元年の太政官布告らしい。郷土史研究会の林清見会長および松浦元治理事にわざわざ末廣まで来ていただいて検分してもらったところ、果たせるかな慶応四年三月の太政官布告で、集会や徒党を禁止する旨のものであることがわかった。

次郎長の大転機は明治元年。この高札は次郎長展示品として飾るのにもっとも相応しいものといえるだろう。

もう一つの発見は、山岡鉄舟から白井音次郎にプレゼントされた明治天皇の御料箸。白井音次郎は慶喜公の家来で、いわば謎の人物だが、末廣の地主でもある。江戸城無血開城の道をひらいた鉄舟の行動の背後に白井音次郎の影がちらついている。その影を明らかにすると、維新史の通説がぐらりとするほどの重い謎を白井音次郎は秘めているのである。



市原市公民館前の記念碑

「伏谷如水と清水次郎長ノ碑」除幕式

平成十三年二月二十三日
日市原市で

伏谷如水は次郎長の人生を一八〇度転換させた恩人。維新動乱さなかの明治元年、大総督有栖川宮熾仁親王の下で駿府差配役判事をつとめた浜松藩家老伏谷又左衛門如水は、無警察状態だった駿府（静岡）および清水港の警固役として次郎長を大抜擢した。

アンダーグラウンドから引上げられた次郎長はこの時を境に、世のため人のために尽す生き方に大変身し、後半生を全うする。如水と次郎長をめぐるこの史実は、「東海遊俠伝」にも記され、また如水の家臣間野隆太から次郎長に宛てた清水港警固の指圖書によっても明らかなどところであるが、以外にも世間一般には知られていない。

今から十年近くもさかのぼる。竹内会長が平成四年の「文芸春秋」誌に「次郎長と私」を発表しこの

史実に触れたところ、如水の子孫で千葉県市原市にお住まいの高石鶴子さんから初めて、「私は」と、当時長銀総合研究所で理事長秘書役をつとめていた秋岡栄子さん（当会運営委員）にご連絡があった。

市原市と次郎長翁を知る会との交流は、実にこの時からである。小出善三郎市原市長は、平成八年二月の「広報いちばら」に「市原と清水」と題し、「浜松藩の家老伏谷如水は、お国替えによって明治二年に市原市に移住してきました」と書出した上で、如水と次郎長のかかわりを市原市民にわかりやすく紹介した。市長さんも市原と清水を結ぶ明治の史実に注目したのである。

以来、市原と清水との交流が始まり、昨年（平成十二年）四月には二十八人の当会会員が一泊旅行で

市原を訪問。如水墓の参詣、鶴舞藩を知る会（内藤昇会長）をはじめ、市長や市原市民と交流したばかりでなく、十一月には市原市から鶴舞藩を知る会の内藤会長ほか三十一名が来清し、梅蔭寺や生家など次郎長史跡を訪ね、エールを交換した。

このような交流の積み重ねを経て、澎湃として湧き起こってきたのが、記念碑の建立である。「如水と次郎長の関わりを後世に残すモニュメントを」との声が市原と清水の交流を通じて、どこからともなく起こり、その声は次第に大きくなって遂に実を結ぶこととなったのである。

碑を建てる場所は、伏谷如水の墓所市原市鶴舞に決定された。最終的には鶴舞公民館の玄関前の敷地に決まったが、用地や石材の選定などに一方ならぬご苦労をおかけしたのが、鶴舞藩を知る会の内藤昇会長、塚原茂さん、高石鶴子さんらである。とくに高石さんは、建碑の費用についても全面的なご協力を約され、（高石さんは表面に出ることを固辞されているが）実行された。次郎長翁を知る会として、誌上を借りて心から御礼を申述べたい。

史跡探訪部会と広報部会を設置

当会の活動の大きな柱は、次郎長の史跡を旅する「次郎長ツアー」と、テレビ、新聞などメディアに対するパブリシティ活動。東海道四百年祭との連携で次郎長をとりあげるイベントが増えれば増えるほど、この二本柱の役割は重くなる。

そこで三月に開かれた運営委員会（委員長・竹内宏会長）で、専門部会として史跡探訪部会および広報部会を設置することが決定された。

碑の表題は「伏谷如水清水次郎長ノ碑」とし題字の揮毫は竹内宏会長、由来を記す撰文は田口英爾の受持と決まった。竹内会長としては、平成十一年六月十二日に除幕された「次郎長宅跡」の碑につづく揮毫である。

力強いみごとな題字も完成し、苦心の碑文も整って、原地石材店が彫字に取組み、一月中には石碑本体が完成、除幕を待つばかりとなった。

平成十三年二月二十三日、快晴。この日清水からは竹内会長以下運営委員が市原市鶴舞公民館の式典会場に如水墓参をすませた上で駆けつけ、除幕式に列席する。式典の設営はすべて鶴舞藩を知る会の皆さんである。式典には小出市原市長をはじめ市の要職の方々、千葉市からは房総観光協会安田会長などが列席された。

奇しくも二月二十三日は、先年お亡くなりになった如水の子孫、伏谷庸夫氏の命日に当る。妹の高石鶴子さんとしては感慨ひとしおであったと推察される。完成した記念碑は前頁の写真のように立派で、市原市の皆さんにお礼を申し述べたい。

それぞれのメンバーは以下の通り。*印は部会長

〈史跡探訪部会〉 *長田三則 鈴木幸江 服部千恵子 杉本恭子 室伏尚美

〈広報部会〉 *田口英爾 堤利博 天野香 室伏尚美 中田元比古

広報部会は会報「次郎長」の編集発行と同時に、インターネットによるホームページを開設し、全国、全世界に次郎長情報を発信する。担当は当会の希望の星、若さを誇る中田元比古です。

次郎長ホームページの開設

『次郎長翁を知る会』



清水の生んだ偉大な人物を伝える会

はしめ

インターネット上で浪曲や講談の次郎長を紹介するページは数多くあります。私もこの『次郎長翁を知る会』のホームページの作成にたずさわる以前に、インターネットで郷土清水を紹介する自作ホームページを作成し、その中で次郎長を紹介していますが、「二十八人の子分は実在したのか？」とか「河豚にあたった話はほんとうにあったのか？」などといった講談浪曲の次郎長に対する質問がほとんどです。多くの人にとっての次郎長はやはり浪曲の中の次郎長なのだということがよくわかります。

われわれは「次郎長の人生の第三幕」ともいえる後半生をクロージングアップすることで、次郎長のことをよく知らない若い年代層や、浪曲しか知らない年代の人たちにも後半生の次郎長を広く知っていただき、次郎長の魅力のすべてをわかってもらえるようIT（情報技術革新）を駆使して「人間次郎長」を、全国いや全世界へと発信して行こう。そんな想いで『次郎長翁を知る会』のホームページを開設しました。皆様の次郎長に対する思

いと研究資料をたよりに、わかりやすく親しみやすい、なおかつ深みのあるホームページにして行きたいと思っております。

距離、時間、場所を問わず、欲しい情報、見たい画像が瞬時に手に入ってしまう。本当にすごい時代になってきました。でも、私をもっとすごいと思うのは、百年以上も前、ＩＴのかけらもなかった時代に、一介の庶民に過ぎなかった次郎長が既にネットワークを駆使して幕末維新という混乱期の中を駆け抜けていたことです。アンダーグラウンドに身を置き、数多い争い事に身を投じていながらも幕末維新の動乱を乗り切り、七十四歳の大往生を遂げるまでの人生をまっとうさせたのは、彼の身における危険を事前に察する、強力なアンテナとも言える情報収集能力のすごさではなかったでしょうか？ホームページを作成するにあたって、改めて次郎長の生き方を学ぶ想いです。

先日「末廣」がオープンした日、一通の祝いの電子メールが届いた。差出人は統計の始祖、杉享二の御子孫の方からでした。何かの新聞等でオープンを知りえたと思われませんが、明らかにそれは仮設の当会ホームページに宛てられたものでし

辻の勝五郎記念碑の建立―富士市法雲寺で

次郎長子分の一人、辻の勝五郎（本名加藤勝五郎）の生家は富士市今泉。菩提寺の法雲寺と檀徒の方々の努力で、記念碑が法雲寺境内に建立され、九月十七日（平成十二年）に落慶法要が行われた。当会からは竹内会長の代理として長田副会長、服部知恵子委員および富士市在住の高橋俊夫氏が参

た。広い世の中、まだまだ次郎長の人柄証言をしてくれる方がきつと居るに違いない。かつて天田五郎が「遊侠伝」を使って大衆に肉親探しをアピールしたように、ホームページを通じて次郎長を知る証言人物を捜し求めていくのではないかな。

『次郎長翁を知る会』ホームページは七月初旬に正式にオープンの予定です。 <http://jirocho.org>

広報部会 中田 元比古

末廣とボランティアガイド

突然「日本経済新聞生活情報部の浅川という者です」という電話があり、次郎長の船宿・末廣でボランティアガイドをしている所を記事にしたいという。

五月十一日、浅川記者は東京より清水駅に十時、末廣には十時半ごろ到着という。ふるさとガイド鎌谷三千男会長をはじめ杉田幸雄さん、村上七郎さん、久保田裕夫さん、室伏尚美さん、石川昌さん、西村嘉夫さんたちが集まり、記者を待ち受けた。十時ごろ静岡の高校生が四十五名人館したので、

列した。法要は前夜半から降り続いていた雨も上がり、住職および近隣の僧侶たちによる説経のほか、清水次郎長道中保存会の踊り、投げ餅もあり盛大に行われた。

辻の勝五郎の生涯は、次郎長研究家梅田貞夫氏による碑文から知ることが出来る。（長田三則）

末廣は若い学生でいっぱいになった。学生たちは清水港でテクノスーパライナーに乗船体験をするために来清し、末廣に寄ったという。引率の先生の一人は清水市に在住で開館したばかりに一度来たといいながら、私の説明を聞いている。偶然友人も立ち寄ったのでこの時とばかり張り切ってしまった。

私は柱とか欄間、床板などを指さして次郎長が船宿をしていたときの材料を使っていると説明しながら「この大黒柱は次郎長が触っていたと思います」と言うとう居合わせた人は「この柱がねえ」といつて手を出し柱に触れ、笑いながら納得する。

この頃浅川記者が見えた。私は「最後の將軍徳川慶喜公が写した清水港の写真の一枚に、末廣が写っていたことがわかったそうです」と言いながら展示されている写真の前に移動。そこには慶喜公から拝領した熨斗目（のしめ）の紋服もあり、次郎長と慶喜公との接点がよく分かると言えば、領きながら真剣に展示物を見ている。

浅川記者とは二階の座敷でテーブルを囲み、ガイドの人達と次郎長に関する話をする。静岡には安東の文吉という親分がいて、次郎長より先輩格だ。浅川記者からは「文吉親分のことでは何か伝わっていますか」という質問も出た。

浅川記者は、この後、梅蔭寺で取材があるというので、私は「杜土の墓」と、次郎長の英語塾にゆかりの明徳館（後の清水小学校）があった成就院の前を通り、お寺まで案内をした。（天野 香）

※この時の記事は五月十六日の日本経済新聞夕刊（全国版）で報道されました。